

日常会話における「～れば」の意味機能

池谷 知子

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所
tikeya[at]shoin.ac.jp

The Semantic Function of the Conditional Form “-reba” in Daily Conversation

Tomoko IKEYA

Kobe Shoin Women’s University Institute of Linguistic Sciences

Abstract

日本語を外国語として学ぶ日本語学習者は、「春になれば桜が咲きます」のように動詞の仮定形に「～れば」がついた形を「条件」を表すものとして学ぶ。日本語の条件を表すものとして、「と、れば、たら、なら」があり、その使い分けが昔から大きな研究テーマとなっている。その中で、書き言葉では「～れば」が、話し言葉では「～たら」が使われる傾向があることが指摘されている。

本研究では国立国語研究所が公開している「日本語日常会話コーパス CEJC」を利用し、自然会話における「～れば」を抽出し、「～れば」に前節する動詞のタイプや共起する文末表現について分析した。その結果、日本語の教科書の中で習う典型的な条件文「～れば」と、日本人母語話者が会話の中で無意識で使っている「～れば」の用法に乖離があることが明らかとなった。このことによって、教科書の日本語と自然な日本語をつなげる一助となることが期待される。

Students learning Japanese as a second language learn a suffix *-reba* as a type of conditional when the suffix is attached to the conditional form of verbs, for example *Haru ni nareba, Sakura ga sakimasu*. “(Literally) If spring comes, cherry blossoms start to bloom.” Many other studies investigate the distribution of the forms *-to*, *-reba*, *-tara*, and *-nara*, as the conditional forms in Japanese. And it had been proposed that *-reba* form tends to be used in written language, whereas *-tara* form is preferred in colloquial expressions.

In this study, the analysis of *-reba* form has been conducted with groups of preceding verbs and co-occurring expressions in the consequent clauses. The Corpus of Everyday Japanese Conversation (CEJC) provided by National Institute for Japanese Language and Linguistics was utilized to extract *-reba* examples in natural conversation. The result shows that there is a divergence of usage between *-reba* form introduced in Japanese language textbooks as a typical conditional sentence, and *-reba* form spoken unconsciously in daily conversation. The result helps to fill a gap of the semantic function and makes Japanese language education more applicable.

キーワード: 教科書の日本語, 条件文, 日本語日常会話コーパス (モニター公開版) CEJC
Keywords: Japanese textbook, Conditional Forms, Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC

1. はじめに

動詞の仮定形に「～れば」がついた形は一般条件を表す事で知られている。日本語の教科書『みんなの日本語 初級II』では35課で「～れば」を学習する。そこでの初出の例文をあげておく。

- (1) 春になれば、桜が咲きます。
- (2) 天気がよければ、向こうに島が見えます。

日本語の条件文には「と・れば・たら・なら」という4つの形式がある事が知られており、日本語教育では、しばしばその使い分けが問題になってきた。その中でも「～れば」は「一般的な法則や論理関係を述べるのによく用いられる」(『みんなの日本語 初級II 教え方の手引き』p. 97) 「一般的(客観的)条件、論理・理屈を表す。また、反復・習慣を表す」(『日本語誤用時点』p. 611)とされており、日本語学習者にとって習得の難しいものとされている。

「れば形」の難しさの1つに後件の共起制限がある。「～れば」を英語のifのように捉えてしまうと、日本語学習者は(3)のような文を作りがちであるが、「～れば」は後件に意志表現をとることができないため、非文となるとされている。(非文は*で表す)

- (3) *駅に着けば、電話してください。(=駅に着いたら、電話してください)

こういう場合は、別の条件文である「～たら」を使うべきだとされている。しかし、その一方で、前件が状態動詞であれば、後件に意志表現をとることができることも知られている。

- (4) 時間があれば、電話してください。

日本語教師として、「～れば」を教える時、これらのことを教えなければならないのであるが、複雑な共起制限がある「～れば」を、日本語母語話者が実際にどのように使っているのかに関心を持った。また、日本語学習者は共起制限がほとんどない「～たら」を『みんなの日本語 初級I』25課で学ぶため、それより10課以上後ろの35課で出てきて、

かつ、ルールが複雑な「~れば」を積極的に使いたがらない。そこで、実際の自然会話の「~れば」を100例集め、その構文的条件や意味機能の分析を行い、日常会話における「~れば」の意味機能を明らかにする。

2. 先行研究

市川保子 (2005:414) 『初級日本語文法と教え方のポイント』では「~れば」について、日本語学習者にとってどこが難しいのか、そのポイントを質問形式で5つあげている。それをまとめると以下のようになる。

- ① 「~れば」の形を正しく作るのが難しい
- ② 「~れば」は主節の文末に意志表現がとれるのか
- ③ 「~れば」と「~たら」「~と」の違いは何か
- ④ 「~れば」は書き言葉か
- ⑤ 「~れば」は過去でも使えるのか

上記の③の「~れば」と「~たら」「~と」の違いは複雑な問題であり、仁田 (1987)、益岡 (1993)、有田 (1991)、前田 (2009) をはじめとして多くの先行研究に議論を譲る。残り4つに関して、簡単にまとめておく。

① 「~れば」の形を正しく作るのが難しい

表1のように語幹に eba あるいは reba が付き、「行けば」「着れば」のような形を「ば形」あるいは「れば形」と呼ぶことが多い。「~ば」になるか、「~れば」になるかは語幹によって決まっている。子音動詞はエ段の假定形に「ば」が接続するが、母音動詞は語幹に「れば」が接続することが知られている。また、形容詞であれば「~ければ」になり、名詞と形容動詞であれば「~ならば」になる。そのため、先行研究でも「ば形」であったり、「れば形」であったり、その表記と呼び方がばらばらになっている。本研究では動詞に接続する「~れば」を考察の対象とし形容詞・形容動詞・名詞は考察の対象外とする。本研究は「~ば」全体を扱うわけではないので、動詞の「ば形」を「れば形」と呼ぶことにする。ただし、先行研究を引用する際は原典の表記に従うものとする。

表1: 「れば形」の活用一覧

	辞書形	れば形	ローマ字表記
子音動詞	行く 走る	行けば 走れば	ik-eba, hashir-eba
母音動詞	着る 寝る	着れば 寝れば	ki-reba, ne-reba
サ行・カ行変格活用	する くる	すれば くれば	sureba, kureba
形容詞	早い	早ければ	haya-kereba
形容動詞・名詞	元気な 学生	元気ならば 学生ならば	genki-naraba, gakusei-naraba

日本語学習者にとっては表1のように「～ば」「～れば」「～ければ」「～ならば」と様々な形があることが、「～れば」の形を正しく作るのが難しくしている原因だと考えられる。そのため、実際に日本語学習者に文を作らせると(5)のような活用に関する誤用が出る。

(5) *スイッチを入れられれば、動きます。<『日本語誤用辞典』より ボリビア>

「入れる」の「れば形」は「入れれば(irer-eba)」であるが、「ら」が過剰に付いている。可能形の「入れられる(irer-areru)」と似ているため、混乱している可能性。

②「～れば」は主節の文末に意志表現がとれるのか

1節「はじめに」でも述べたように、「れば形」の文末制限について多くの先行研究で指摘されている。「れば形」は基本的には後件には意志表現をとることができない。そのため、意志表現を取る必要がある場合は、後件に意志表現が取れる「～たら」や「～なら」など、別の条件形式が選ばれることが知られている。

(6) *駅に着けば、電話してください。(依頼)

→駅に着いたら、電話してください

(7) *京都に行けば、桜を見たい。(意志)

京都に行ったら、桜を見たい。

松岡弘監修(2000:222)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』で、後件の制限について述べている部分を引用する。

◆「～ば」の文では、原則として、後件に意志・希望・命令などの表現が来ることがありません。この点で後に述べる「～たら」と異なります。

(5) {×帰宅すれば／○帰宅したら}、必ずうがいをしなさい。

ただし、前件の述語が状態性の場合((6))、および前件と後件の主体が異なる場合((7))は例外となります。

(6) わからないことがあれば、いつでも聞いて下さい。

(7) 父が許してくれれば、彼と結婚するつもりです。

このように、「れば形」は結びつく動詞によって、主節の文末に制限があつたりなかったりする。それを表2としてまとめておく。

表2: 「れば形」に前節する動詞と文末制限

前件	後件
動作性の動詞+れば	制限あり
状態性の動詞+れば	制限なし

そのため、実際に日本語学習者に文を作らせると(8)のような文末制限に関わる誤用が出てしまう。

(8) ?そのれいぞうご、捨てれば、私にください。<『日本語誤用辞典』より ブラジル>
→その冷蔵庫、捨てるなら、私にください。

(8)が誤用になるのは、後件が依頼表現であるだけでなく、前件と後件の時間に関するねじれも問題になっている。これまでの研究で「れば形」は前件が起こった後に後件が起こるという前後関係がなければならぬことが指摘されている。

(9) 春になれば、桜が咲きます。(=(1)を再掲)

春になる (前件)→後に→桜が咲く (後件)

(10) その冷蔵庫を捨てれば、私にください。(=(8)を改変)

×冷蔵庫を捨てる (前件)→後に→私にくれる (後件)

○私にくれる (後件)→後に→冷蔵庫をすてる (前件)

(10)を見るとわかるように、冷蔵庫をもらうのは、冷蔵庫を捨てる前であるため、時間的な順序からも(10)は非文になる。もし、これを言いたいなら、時間的前後関係を問わない「なら」を使って、「その冷蔵庫を捨てるなら、私にください」になる。

④ 「～れば」は書き言葉か

益岡(1993:18)では「～たら」と「～れば」の違いについて「文章体ではレバ形式が好まれ、口語体ではタラ形式が好まれる、という傾向が存在することが否定しがたい」と述べている。益岡以外にも、多くの先行研究で、「～れば」が書き言葉的であることが指摘されている。おそらく、「れば形」が表す条件文の性質のためだと思われる。「れば形」の意味としてグループジャマシイ(1998)『日本語文型辞典』では次のように述べられている。

特定の個人やものごとではなく、ものごと一般についての条件を述べる表現で、「Xが成立すれば必ずYが成立する」という意味を表す。特定の時間にかかわらず恒常的に成り立つ論理的、法則的な因果関係を表し、文末はいつも辞書形が用いられる。個人的な経験や個別的な一回きりの出来事を問題にするのではなく、「Xが成立した場合には、当然Yになる」「一般的にそうなる」「本質的にそうだ」という場合にも使われる。

(11) 10を2で割れば5になる。(一般条件)<『日本語文型辞典』より>

(12) 経済状態が悪化すれば犯罪が増加する。(一般条件)<『日本語文型辞典』より>

(13) 風が吹けば桶屋がもうかる。(ことわざ)<『日本語文型辞典』より>

一般条件を表し、特定の時間にかかわらず恒常的に成り立つ論理的な関係や法則的な因果関係を表し、文末が辞書形ということから、自然真理、法則、ことわざなど抽象的で堅い意味を表すのに向いている。そのため、書き言葉的だと言われているのだろう。しかし、これはあくまで傾向であって、「れば形」が話し言葉で使われないわけではない。

⑤ 「～れば」は過去でも使えるのか

「れば形」は時間制から開放された一般的条件を表すことから、一見、過去形とは相性が悪いことが予測されるが、「れば形」では過去形も言える。市川 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』では次のように述べられている。

「～ば」は非過去の文で使われることが多いですが、過去の文で使われる場合もあります。その場合は「過去の習慣」と「認識」を表します。

そして、その例として次のような文をあげている。

(14) 学生時代は冬になれば、スキーばかりしていた。(過去の習慣) <市川 (2005) より>

(15) よく見れば、彼女は美人ではなかった。(認識) <市川 (2005) より>

「れば形」は一般条件を表すが、同時に「娘は暇さえあれば、絵を描いている」のように個人のことで、複数回起こっていれば「現在の習慣・繰り返し」を表すことができる。それが過去に行われると「過去の習慣」になる。

このように、「れば形」には様々な制限があり、誤用を生みやすい。また、「れば形」以外にも条件を表現する文型があるため、「れば形」を回避してコミュニケーションを取ることは可能である。そこで、日本語母語話者はこのように制限が多い「れば形」を実際どのように使っているのかという疑問が生まれた。従来の「れば形」の研究は、主に書かれた言葉を分析対象としてきた。それは、例文を集める際に、作例や書かれたものを対象としていたからである。そのため、我々が話し言葉でどのように「れば形」を使っているのかは、研究されることがあまりなかった。しかし、近年、様々なコーパスが利用できるようになり、研究の可能性が広がってきている。

3. 分析方法

今回、自然な会話での「れば形」の用例を採集するため、国立国語研究所が公開している『日本語日常会話コーパス』(Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC) を利用した。このコーパスについて国立国語研究所の「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html>) のページでは以下のように述べられている。

さまざまな場面における日常会話をバランスよく収めたコーパスです。研究の可能性を広げるために、映像まで含めて公開しています。日常場面を扱うコーパスとしては世界初の試みです。

このコーパスは 2021 年度末に一般公開を予定しているが、それに先立ち、2018 年 12 月から 50 時間分の音声データをモニター版として研究利用を目的とした公開を始めた。今回はそのモニター版を利用して「れば形」を 100 例集め分析を行った。「れば形」には前節の先行研究で述べたように条件文としての用法があることが広く知られているが、その他にも条件文とはいえないようなものもある。

国立国語研究所（1964）では条件文として因果関係がないものとして、以下の3つの用法をあげている。（例文は国立国語研究所（1964）から抜粋）

■周辺の用法

他の表現に言い換えられない用法

- (16) 表面は浮き浮きしているが、芯は固いという人もあれば、男とみれば、誰でもよいのだと評するひともあった。（列挙）

■陳述的用法

前後に「いい」「いけない」「だめだ」など評価をあらわす語がつづいて、全体として一つの述語に近い表現をつくっているもの。

- (17) そこでどんなカメラを選べばいいかを簡単に述べてみましょう。

- (18) 俗な言葉でいえば、親気分である人でないといけない。

■前置き

題目の提示「発言内容についての注釈」「表現形式についての注釈」「根拠」などを下位分類としてあげている。

- (19) 合作映画といえど必ずしもおもしろからざる結果をまねくものとの定説を、かばそい八千草薫がけなげにも、うち破ってくれたのだから。

(18)と(19)を見ると、両方とも「いえば」という形式をとっている。それにも関わらず、後ろに評価を表す語がついている(18)は「陳述的用法」、(19)のように題目の提示としてのみ働いているものは「前置き」として分類されている。この研究の難しいところは、前件の「れば形」だけでも用法が決まるものでもないし、後件だけでも決まるものでもないところにある。

前田（2009:51）でもこれらを非条件的な用法として、国立国語研究所（1964）の研究をさらに深めた。前田はこれらの用法について次のようにのべている。

これらの用法は、国立国語研究所（1964）において、「周辺の用法」「陳述的用法」「前置き」と分類されたものである。仮定性も因果関係も持たないため、「条件」とは呼びにくく、ほとんどが固定的でイディオマティックであって、「条件」とは別個の表現として捉えるのが適切だと思われる。無論、同じ形式を用いるのであるから、歴史的にはもちろん、共時的にも派生の過程を分析することは可能であろうが、条件接続辞の用法としては、この位置で扱うのが適切であろう。

つまり、前田は（2009）はこれらを条件文としてみなしていないのである。前田（2009）で非条件的用法とされているものを例文と一緒にまとめておく。（例文は前田（2009）から抜粋）

■並列・列挙

状態性述語を取ることが多く、その時は2つの事柄の共存と非共存。動作性述語を取ることもあり、その時は、属性としての動きや能力。

(20) 一人も患者がこない日もあれば二十名以上の日もあった。

(21) 女の疑いを感じたこともなければ浪費家でもない。

■評価的用法

条件接続辞「~れば」に「いい」が付属した「すればいい・したらいい・するといい」「しなければならぬ・したらいけない」「しなければならぬ・しないとイケない」など、当為的意味、あるいは評価のモダリティを表現する複合的な文末表現をとるもの。

(22) 「やっでごらんさい」「できませんよ」「ただ玉に当てればいいんです」

■終助詞的用法

聞き手主体の意志的動作の場合、勧めを表し、それ以外、話し手の非意志的動作や聞き手・話し手以外の動作・状態の場合は、多くは終助詞を伴って、願望を表す。

また反事実的な文では話者の残念感・不満足・後悔などを表す。共に評価的用法「すればいい」「したらいい」からの省略・派生。

(23) 「…ええこと、ちっともない」「おいしいものでも食べれば？」

(24) 「おいしいものが食べられればねえ」

■後置詞的用法

実質的な意味を失った動詞とともに名詞を受ける用法。「~れば」を伴うものは、複合格助詞として機能する形式としては、「Nから見れば」「Nにしてみれば」「Nに比べれば」等があり、複合とりたて助詞として提題を表す機能を持つ形式には、「Nと言えよ」「Nって言えよ」「すると言えよ」等がある。

(25) なにしろロバール・フィリップといえよ、パリでも一流中の一流のデザイナーで、帝王の渾名をほしいままにしている。

■接続詞的用法

ソ系の指示語や、後置詞的用法と同じく形式化した動詞を伴って、一つの接続詞的な機能を果たす形式。「~れば」を伴うものは、複合格助詞として機能する形式としては、「考えてみれば」「何となれば」「できれば」「聞けば」「思えば」「どちらかと言えよ」「そう言えよ」等があり、複合とりたて助詞として提題を表す機能を持つ形式には、「Nと言えよ」「Nって言えよ」「すると言えよ」等がある。

高橋 (1983) (2003) では条件節が「後置詞化したもの」について詳しく分析しており、次のように述べられている。

条件節は従属節であるにも関わらず、モダリティーをもっていることによって、陳述的に主節のモダリティーに影響をあたえ、主節に対して相対的な独立性をもつ。このことによって、条件節構文は、ふたつの節のあいだに陳述的な分割をもらすのだが、後置詞化したものは、節ではなく、＜名詞＋後置詞＞が文の部分でしかないので、この分割が主題と説明のような関係、あるいはかかりとむすびのような関係になる。

また、その条件形から発達した後置詞の働きについては次のように述べられている。

条件形から発達した後置詞は、かかりの、えらびだしの性格によって、話題や観点をひきだすはたらきをもつことになる。話題をさそいだすはたらきと、みるたちばや根拠を選び出すはたらきは、もともと同じところからでてきたものとおもわれるが、実際には、その特務分担の専門化がかなりすすんでいるようである。

つまり、高橋は後置化したものは「話題を誘い出すはたらき」と「みるたちばや根拠を選び出すはたらき」の2つがあることを指摘している。

これまで「れば形」について、主な先行研究を概観してきたが、これらの研究は「と、れば、たら、なら」全体を分析しており先行研究として「れば形」のみの部分を抜粋してまとめた。そのため、非条件的用法に関しても、特に「れば形」に特化して述べているわけではなかった。本研究は「れば形」の用法のみに絞って議論を進めていく。

また、「れば形」の中で、普遍的な一般条件として使われるものを「条件的用法」、反対に、一般条件的な意味がない用法を「非条件的用法」とし、本研究では特に「非条件的用法」に注目して分析していく。

本研究では国立国語研究所（1964）にならい、非条件的用法を「A 前置きの用法」「B モダリティー的用法」「C イディオマティックな用法」の3つにわけることとする。本研究の分類と国立国語研究所（1964）と前田（2009）の分類の大まかな対応関係を整理しておく。（細部の細かい分類については差異がある部分もある）

A 前置きの用法

話題や観点をひきだすはたらきをもつ。前件が主題、後件が説明のような関係になり、後件の文型には制限はない。

→国立国語研究所（1964）の「前置き」

→前田（2009）の「後置詞的用法」

B モダリティー的用法

「～ばいい」のように、後件に「いい」のような評価的なものが代表的な例であるが、それ以外にも普通の動詞や可能形のものもある。これらは「～ばいいだろう」「～いいよ」のように文末にモダリティー要素や終助詞がつき、話し手の判断を表す。多くが後件に話し手にとって望ましい事態が見込まれ、この形式と意味が文法化すると、「売れば？」

のように後件が流れてなくなってしまっても、「勧め」のような機能を維持する。

→国立国語研究所(1964)の「陳述的用法」

→前田(2009)の「評価的用法」「終助詞的用法」

C イディオマティックな用法

決まった言い方でその前後の形式とともに文法化しているもの。

あるいは、前置き用法よりさらに接続詞化し、「そう言えば」「言ってみれば」「考えてみれば」のように「れば形」付く形が比較的短いもの。比較的文頭に近いところに置かれる。

→国立国語研究所(1964)の「周辺の用法」

→前田(2009)の「並列・列挙」「接続詞的用法」

これらの非条件的用法は本来は条件的用法であったものが、徐々に文法化し、このような接辞に変化していったものだと考える。そのため、同じ動詞を使っている、文法化の度合いが異なる場合がある。同じ「言えば(いえば)」でも文法化の程度によって、提題機能がある(26)は「A 前置きの用法」になる。一方、完全に文法化しており、その前後に自由な表現を許容することがない(27)(28)は「C イディオマティックな用法」になる。

(26) なにしるロベール・フィリップといえ、パリでも一流中の一流のデザイナーで、帝王の渾名をほしいままにしている。(=25)再掲 < A 前置きの用法 >

(27) そういえば、あの書類、どこに行ったっけ。 < C イディオマティックな用法 >

(28) どちらかといえ、シャイな方だ。 < C イディオマティックな用法 >

また、同じ「言えば」を使っている、(29) 一般的条件や(30) 習慣のように解釈されるものは「条件的用法」のため、「非条件的な用法」には入れない。

(29) 文句を言えば、言う方も言われる方も不愉快になる。 < 条件的用法：一般的条件 >

(30) 決まりとして、もし、作家が家まで原稿を取りに来いと言え、行くことになっている。 < 条件的用法：習慣 >

4. 分析結果

4.1. 日常会話における条件的用法と非条件的用法の割合

自然会話 100 例を分析した結果、以下のような結果となった。まず、条件用法と非条件用法の使用率を明らかにする。

条件的用法はいわゆる日本語学習者が最初に習うような一般条件の「春になれば桜が咲きます」のような文のことをいう。それに加えて、現在の習慣・複数回起こっていることも含める。つまり、「れば形」の一般条件と習慣を表すもののみを条件用法とする。

条件的用法と判断するための基準として、次のような基準をたてて分類した。

① 一般的な法則や論理関係を述べている。

- ② 複数回起こっているなど、習慣として解釈できる。
- ③ 前件が起こったせいで後件が起こるという因果関係がある。

反対に非条件的用法は①～③の条件用法の基準を満たさないもので、かつ、構文または意味用法に一定のパターンが抽出できるものとした。

これらを基準に日常会話 100 例における「条件的用法」と「非条件的用法」の割合を調べると、条件的用法が 0 件で、非条件的用法が 100 件だった。ここからわかることは、我々の日常会話の中では、条件文としては「れば形」をほとんど使っていない可能性がある。もちろん、用例を増やせば必ず条件的用法が出てくることは間違いないが、「れば形」はよく言われる「春になれば桜が咲きます」のような条件用法ではなくて、「大阪名物と言えたら焼きたよだね」(A 前置き用法)「遅いからもう帰れば?」(B モダリティ用法)「そういえば、そういうこともあったみたいだね」(C イディオマティックな用法)のような非条件用法として現れているのである。

それでは、「A 前置きの用法」「B モダリティー的用法」「C イディオマティックな用法」のそれぞれの用法について見ていく。『日本語日常会話コーパス』はポーズ、フィラー、言い淀み、会話のオーバーラップなどがそのまま文字化されている。議論を簡便化するために、それらのある程度整えた形で載せる。ただし、「言う」を「ゆう」などで音声化しているものは自然発話を尊重して、そのままにしている。

4.2. 「A 前置きの用法」「B モダリティー的用法」「C イディオマティックな用法」の割合

「A 前置きの用法」「B モダリティー的用法」「C イディオマティックな用法」が 100 例中どのくらいあったかをまとめると以下のような結果となった。

表 3: 「A 前置きの用法」「B モダリティー的用法」「C イディオマティックな用法」の割合

A 前置きの用法	7 件
B モダリティー的用法	75 件
C イディオマティックな用法	18 件

それぞれの用法について、採集した例とともに詳しく分析していく。

A 前置きの用法 7 件

話題や観点をひきだすはたらきをもつ。7 件観察された。前件が主題、後件が説明のような関係になり、後件の文型に制限はない。現れた形式としては、「～と言え」「～って言え」「～に比べれば」「～を考えれば」「～と思えば」であった。もちろん、これ以外にも、先行研究であげられている「～から見れば」「～にしてみれば」などもこれに含まれる。

- (31) えー、なんかレモンスカッシュと言え、クエン酸、すごい。

- (32) だってみんなに比べれば、すごい元気じゃん。
 (33) だってさ、何にもない所だって転ぶんだからさ、それを考えれば、心配じゃない。

B モダリティ的用法 75 件

これが今回の話し言葉の中では一番多く現れた。75 件観察された。後件に「いい」のような評価的なものを取るパターンが代表的な例であるが、それ以外にも普通の動詞や可能形のものもあった。これらは文末にモダリティー要素や終助詞がつき、話し手の判断を表す。多くが後件に話し手にとって望ましい事態が見込まれ、この形式と意味が文法化すると、「売れば？」のように後件が流れてなくなってしまうても、「勧め」のような機能を維持し、話し手がそれを望ましいと思って聞き手に勧めている意味を表すようになる。

前田(2009)の「評価的用法」「終助詞的用法」に相当する。「評価的用法」の代表的な例としては「すればいい」のように「いい」をはじめとした判断評価的なものを後件に取る。

前田は(2009)は「終助詞的用法」には、次のような意味があるとしていた。

聞き手主体の意志的動作…勧め

話し手の非意志的動作や聞き手・話し手以外の動作・状態動詞…願望

反事実的な文…話し手の残念感・不満足・後悔

「B モダリティ的用法」は、「やればいい」「すればいい」「あればいい」「いればいい」「行けばいい」など「～ばいい」という形式で「勧め・アドバイス」を表すことが多くみられた。その他にも(36)(37)のように終助詞「よ」「よね」を使って、「～ばいい」以外にも「勧め・アドバイス」を表すことができる。これらの用法は聞き手が存在し、かつ、聞き手への働きかけを伴う文である。そのため、意味用法としては話し手が聞き手に自分の良いと思っている判断をアドバイスとして勧めるものになる。

<勧め・アドバイス>

- (34) だから夜行けばいいんじゃないのって。(勧め)
 (35) 迷わず進めばいい。(勧め)
 (36) 小田原とかまで行けばなんかあるよ。(勧め)
 (37) (ドライバーの友人が道に悩んでいる) まあ、新都心のほうに向かえば着くよね。(勧め)

「勧め・アドバイス」の用法は多く見られたが、終助詞やモダリティが付くことで、それ以外の意味になることもできる。

- (38) こう撮ればいいかな。 <自己確認>
 (39) あのヘルシオさんみたいなオープンがさ、ちゃんとあればいいけどさ。 <不満足>

(40) 十一時とか十二時に出ればいいの。〈話し手の主張〉

(38)は終助詞「かな」がつくことで、自分の次に行う動作の確認として、独り言的に使われている。(39)は逆接「けど」がついて、話し手はちゃんとしたオープンがほしいが実際にはそれがないという反事実を表しているため、前田(2009)でも述べられている「話者の残念感・不満足」を表す文となっている。(40)は終助詞「の」が付いている。おそらく「のだ」の「だ」が省略されもので、「話者の主張」を表していると考える。これらの例は、文脈依存的に意味が派生するもので、無限の広がりをみせる。ただ、その基本は「～ばいい」という「話し手の望ましいと思っている判断」がベースとなっている。

「～ばいい」は後件の「いい」が流れて、存在しないものも多くみられた。「勧め・アドバイス」になるものが普通だが、(43)のように、「来た時」という過去の地点を示すことで、現在、それが実現していない反事実を表し、全体として、「言ってくれればよかったのに(どうして言わなかったの)」という「残念感・不満足」を表す。後件がなくても、意味解釈ができ、文が成立していることから「～ばいい」はかなり文法化した形式だと言えるだろう。

(41) 売れば? 〈勧め〉

(42) お肉食べれば? 〈勧め〉

(43) 来た時ゆってくれば…。〈不満足〉

「～ばいい」が疑問詞に「～ばいい」がつくパターンも見られた。「～ばいい」が話し手の望ましいと思っている判断を表すため、それを聞き手に聞くと、聞き手にアドバイスや判断を求める文になる。典型例として「どうすればいいですか」などのような文があげられる。

〈判断要求〉疑問詞+ばいい

(44) (運転しながら友人に) どこで曲がればいいんだろ?

(45) 何時に行けばいいって?

また、「勧め・アドバイス」の他に後件に推量のモダリティ要素をとり、話し手の推量や予測、可能性を表すものが見られた。この用法は従来の研究で「れば形」の仮定条件と言われているものである。この仮定条件についてグループジャマシイ(1998)『日本文型辞典』では次のように述べられている。

〈一般条件〉がものごと一般について述べるもので、文末に必ず言い切りの辞書形が使われるのに対し、〈仮定条件〉は〈一般条件〉を特定の個別なことがらに当てはめて予測的に述べる場合の用法で、文末に「だろう」「かもしれない」などを付けることができる。

(例) 〈一般条件〉食事を減らせば誰でもやせる。

(例) 〈仮定条件〉食事を減らせば、あなたもやせるだろう。

ここからわかるように「れば形」は、仮定的なものを表せる。この、まだ定まっていない、起こっていないという「れば形」の仮定性が「推量」「予測」「可能性」などの意

味を生むと考える。話し手自身のことにつけば、これからの予測や可能性になり、話し手の非意志的動作や聞き手・話し手以外の動作につけば「推量」になりやすい。「予測・可能性」の場合、後件が可能形になるものが多く観察された。

■話し手の動作についての場合<予測・可能性>

- (46) (フィンランドでフェリーのチケットを買いたいけれど、フィンランド語がわからないという話をしている) あ、でも最悪、港に行つて、それつてやれば買えそうな気もするけど。
- (47) レポートにまとめるのつて一カ月もあればそう、たぶんできると思うんですけど。
- (48) (車に乗つていて) 三十分あれば行けるでしょう。

■話し手以外の動作についての場合<推量>

- (49) (好きなアーティストのライブが好評であるという話の中で) でも、なんかもっと好評であればもっと長くやるらしいけど。
- (50) まあ、紀ノ国屋とかが、そうゆうものに乗出してくれれば、一発で色々いいものがそろうんだろうけどと思いますけど。

これらの仮定条件をベースにしたものを非条件的用法の1つに入れることについては賛否が分かれるかもしれない。なぜなら、仮定条件も条件文の1つであるからである。

「れば形」の中心的意味について、益岡(1993:2)は以下のように述べている。

レバ形式の中心的な用法は、前件と後件の組み合わせによって、時間を超えて成り立つ一般的な因果関係を表すものである。すなわち、個別的事態が問題になるのではなく、事態間の一般的依存関係に対する認識を表すものである。現実を実現する個別的事態に拘泥しないという点において、非現実の事態を表すと言えるわけである。

益岡の言うように一般条件が「れば形」の中心的意味であるとする研究者は多い。同時に益岡(1993:8)では「れば形」が用法拡張をする場合があるとして、「れば形式は個別的事態を表す場合、仮定的事態を表す傾向が強いという考えを提出したいと思う」とも述べている。しかしながら、「一般条件」と「仮定条件」は同じ条件文でも「普遍的・一般」と「個別」という全く異なる世界を表す。

本研究では、「れば形」の「一般条件」と「仮定条件」を区別する立場を取る。なぜなら、この仮定的な意味を表す「れば形」は、話し手の不確かな判断をベースに、文末につくモダリティー要素によって、その文の意味が決まってくるからである。そのため、それらを取り得る意味にはこれまであげた「勧め・アドバイス」「残念感・不満足」「予測・可能性」「推量」のように、よく使われるものは意味用法のグループとして立てることが可能であるが、それ以外にも文脈によって色々な意味を生む。(52)と(53)と同じように文末に「でしょう」が使われているが、(53)は「予測」の意味にはならず、聞き手に確認や同意を要求する意味になる。

(51) (車に乗っていて) 三十分あれば行けるでしょう。〈予測〉 (=49) 再掲)

(52) (鞆に入った携帯を取りたい友達に) 鞆とればいいんでしょう。〈確認要求〉

(52) の文はまだ起こっていないことを述べているために仮定的ではあるが、前件と後件の結びつきが、因果関係と言えるほど強くない。そのため、形式的には条件文であっても、意味としては条件文として十分ではない。

C イディオマトリックな用法 18 件

決まった言い方でその前後の形式とともに文法化しているものとしては、同じ動詞や同じカテゴリーの動詞を並べる「並列・列挙」がみられた。また、その他に、前置き用法よりさらに接続詞化したものとしては、「そう言えば」「どっちかといえよ」などが見つかった。「そういえば」は、聞き手に話題を提供する働きをし、「どちらかといえよ(どっちかといえよ)」ははっきり言いにくいものについて、あえて自分の立場からの意見を述べる時に使う。今回は観察できなかったが、先行研究であげられているように、「思えば」「考えれば」「振り返ってみれば」「言ってみれば」のように、「れば形」付く形が比較的短く、文頭近くに出てくるものはこの用法に入る。これらをまとめて「話題や観点の引き出し」とする。また、「～すればよかった」のように、後件が過去形になることで現時はそうではないという反事実になり、「後悔」を表すようになる。

〈並列・列挙〉

(53) やればやると思うよ。

(54) ちょっと行けば海だし、ちょっと行けば山だし、ちょっと行けば田舎ンのほうとかだから、ほんと、なんか住みやすい。

〈話題や観点の引き出し〉

(55) そういえば、よっしーだったなと思って、書いてたけど。〈話題提供〉

(56) そういえば、そうゆうこともあったみたいだね。〈話題提供〉

(57) どっちかといえよ、この紫陽花不思議でしょ。〈見る立場や根拠を選び出す〉

〈後悔〉後件が過去形にあることで反事実を表す

(58) そっか、持ってくればよかった。

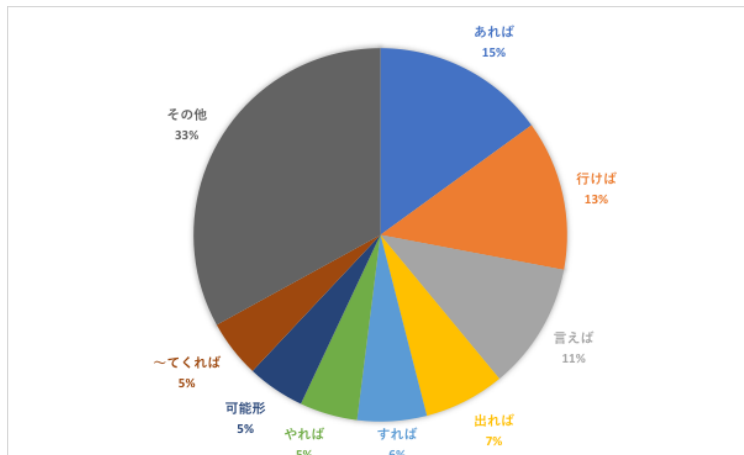
(59) ああ、俺がこれにすればよかったな。

最後に 100 例すべての例を前節する動詞で分類すると、次のような結果となった。「あれば 15%」「行けば 13%」「言えば 11%」「出れば 7%」「すれば 6%」「可能形+ば 5%」「～てくれれば 5%」「やれば 5%」の 8 つの動詞で 67% を占めており、その他の例は 33% だった。

4.3. 「れば形」に前接する動詞

ここからわかることは、非条件形に使われる動詞は、文のパターンが決まっているため、頻度が高いものがある程度決まっている。「あれば」「行けば」「言えば」「出れば」「すれば」の 5 つで用例の 52% となり、出現する動詞にかたよりがみられた。もちろん、今回偶然このような結果になった可能性もあるため、更なる調査が必要である。

表 4: 非条件的用法の「れば形」に前節する動詞



5. まとめ

「れば形」は「一般的（客観的）条件、論理・理屈を表す。また、反復・習慣を表す」ものとして知られ、日本語学習者にとって習得の難しいものとされている。

多くの日本語のテキストにおいて、最初に学ぶ例文は一般的条件を表す「春になれば桜が咲きます」のような例であるが、このような一般条件を表す用法は「日常会話コーパス」から集めた 100 例の中には現れなかった。つまり、一般的に文法書で言われている用法と、日常会話で意識しないで使用している用法とにかなり乖離が見られるのである。

日常会話で見られる「~れば」は、非条件用法のものがほとんどであり、それらは、「A 前置きの用法」「B モダリティ的用法」「C イディオマティックな用法」と分類することができた。非条件用法では使用される文のパターンが決まっており、一番、用例が多かった「B モダリティ的用法」では、文末にモダリティ要素や終助詞をとることで「勧め・アドバイス」「残念感・不満足」「予測・可能性」「推量」などの用法を持つことがわかった。

条件的用法が日常会話に現れにくい理由を考えると、それが一般的（客観的）条件、論理・理屈を表すため、普段の会話に出てきにくいことがあげられる。今回は 100 例を対象に調査を行ったが、会話の話題によっても動詞の出方が変わってくる可能性があるため、さらに広範囲な調査が必要となるだろう。また、書き言葉と話し言葉で「れば形」の用法に差があるかどうかは今後の課題としたい。

参考文献

- 有田節子 (1993) 「日本語条件文研究の変遷」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- 市川保子 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク

- 市川保子 (2007) 『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 市川保子 (2010) 『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク
- 国立国語研究所 (1964) 『現代雑誌九十種の用語用字 第三冊分析』国立国語研究所報告 3
- 砂川有里子 (1998) 『日本語文型辞典』グループジャマシイ編著, くろしお出版
- 白川博之, 庵功雄, 高梨信乃, 中西久美子, 山田敏弘 (2000) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著 (1998) 『みんなの日本語 初級Ⅱ本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著 (2001) 『みんなの日本語 初級Ⅱ教え方の手引き』スリーエーネットワーク
- 高橋太郎 (1983) 「動詞の条件形の後置詞化」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』ひつじ書房
- 仁田義雄 (1987) 「条件づけとその周辺」『日本語学』6-9
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版
- 益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- 松岡弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

Author's web site: <http://www.shoin.ac.jp/>

(受付日: 2020年1月10日)